

# 夏日漫筆

曾根保

## 山牛蒡のその後

復<sup>また</sup>しても、山牛蒡の花が咲く。何もない地面の、去年と同じところから、また山牛蒡が出て来た。七月の初頃、田舎に奉職してゐる友人からの音信の端に、「もう去年の山牛蒡が伸びて、今頃は必ずや君の神経を焦立たせてゐる。ここだらう」と揶揄するやうな言葉が書き添へてあつた。然り、山牛蒡はすすくすく伸びてゐた。めぢやな伸び方、野生的な擴がりに對しては、去年ほどの珍らしさも、興味も感じなくなつたが、「あゝ、丁度一年になるのか」と、感じを新にした。また、七月中旬の集團勤勞作業中に、幼稚園の先生から、「山牛蒡は如何です」ときかれて、私は、「お蔭様で、うちの山牛蒡も女學校の一年生になりました。月日の經つのは速いものです」と答へようとしたが、「速いものですね」とだけ返事をした。今年も賢明な女中は早くも、氣づつかし屋の私の神経を亂すまいと慮つてか、山牛

蒡に何か呪文でも附けて置いたらしい。去年は、日中や夕方、何もするこゝも無し、また、出来もしないから、平生餘り口をきかない女中を捕へて、家主の悪口を竝べたりしたものだが、今年も、うるさ型の家主も、呪文に僻易してか、去年のやうに度々は越境して來なくなつた。従つてそれだけ話題も減つたわけであつた。それで、山牛蒡も極めて順調に伸び、生籬よりもすつき高くなつて、今にも蕾が綻び、柄にもない白い小粒の花が夕べの景色を添へようとしてゐた。それに今年も生籬の裏表に一本づつ、都合二本も出て來て、更に威勢のいゝこゝであつた。さきに「賢明な女中」と云つたが、これは必ずしも皮肉ではない。この女中が長い間家に勤めてゐた間に語つた言葉の中で、私の忘れられないものが一つある。私が、しなければならぬ仕事に手がつかず、書かねばならぬ原稿が書けないで、いらいらして立つたり、坐つたり、溜息を吐いたりしてゐるのを

見て、女中がかう言つたことがある——「わたくしも、お掃除をすませて、本當に落ちついた氣持で、お裁縫に坐れる時、さうしてもぢつと坐つてゐられず、たまへ坐つても、手が氣持よく運ばない日がよくありますが、困つてしまひます。よく考へてみます、そんな時は女として氣高い氣持の時ではないやうです。女もやはり、坐つたら夕方まで、本當に落ちついた、澄んだ、満ち足りた氣持で仕事を續けることが出来なければ値打が無いのではありませうまいか」。これは男の場合にも眞理のやうに思はれる。

さて、話を元にかへして、この女中も、時熟し、愈々良縁が纏つて、七月の十六日に、恐らく山牛蒡にも名残を惜しみつゝ拙宅に暇乞ひをしたが、その數日後、可成り烈しい、雷をも交へた風雨が帝都を襲つた。人間は、いや、私は、蟲のやうに小さくなつて兩戸を閉め切つた家の中でちよこまつてゐた。翌朝果して、庭の人氣者、七尺豊かな山牛蒡が無慘や、根こそぎ吹き倒されてゐた。あかざのやうな肌をした根元が眞白な肉を露はし、ばたりと大きくうつ向に倒され、無念の形相で息絶えたといふ恰好である。圖體が大きいだけに、多少滑稽味もあるにはあるが、やはり哀れな姿であつた。私は庭に降りて、抱きかゝるやう

にして、無駄きは知りつゝも、一先づそのまゝ起して、もとの姿勢に立てゝみた。しかし、しやちこばつてさうにもならない。ごみ箱に入れようにも入れやうがない。暫らく日向に出して置けば、元來が草なのだから、この暑さに枯れ萎んで、ごみ箱のお棺におさまるかもしれない。かう考へて、そのまゝにして置いた、片づけてくれる女中も最早居ないので。

その日の午後のことだつた。何かの拍子に裏木戸が開いたものか、例の家主がはいつて来て、にこにこしながら、倒れてゐる山牛蒡を片手でひつ掴み、極めて無雜作に大骨小骨をボキン・ボキンと折つて、瞬く内に片付けてしまつた。憐みを知らぬ人のやうだつた。私は、「惜しいことに、大風にやられましたよ」と云ふ、見向きもしないで、「へえ、こいつ、木ちやござんせんからね、草のでつけない奴ですから、弱いでさ」と言つた。山牛蒡の端に何かくつゝいてゐるをみえて、絲でもほしく手つきをしてゐるが、椽側に突立つてゐる私の方へつかつかみやつて来て、雨風に打たれた、木綿絲のついた荷札のやうなものを足許に置いた。そして山牛蒡の死骸を抱へて黙つて出て行つてしまつた。足許の紙片を手にとつてみる、インクが滲んでゐる

が、まぎれもない女中の手で「さうかお願ひですから、この山牛蒡を剪らないで下さい」とあつた。あゝ、これが賢明な女中の呪文だつたのか。私は嵐の後の静かな午後之光を浴びて、去つて行つた優しい心根の女中ミ、相も變らず黙りこくつた皮肉な家主の顔ミを思ひ浮べて微笑したのでつた。

來年も亦山牛蒡は出て來るだらう。家の山牛蒡さんは女學校の二年生ミなり、かつての女中も、もし國策に添ふ決心なら、その頃は生れたばかりの山牛蒡を抱いて訪ねて來てくれるかもしれない。

### 想ひ出しては笑つてゐる

今宵も私は想ひ出して獨り笑つてゐる。その時はびつくりもし、餘りの無禮に憤るのも當然だつたであらうが、私は今も嬉しくて獨りで笑つてゐる。家の者にも話さず、他人にも語らないでゐる。眞晝に路を歩いてゐても、あの日のやうなこゝろが、も一度位起らないものかしらミ、きよろきよろ見廻すこゝろさへある。電車の中でも時々想ひ出して獨りで笑つてゐる。近頃私に珍らしい事件である。

雑司谷の假寓から二三軒出るミ前の同僚、今の教學官水野敏雄さんのお宅がある。學校では修身、教育の受持であ

つた關係からか、人その人は勿論、そのお住ひのあたりにさへも何かしら嚴かなものが漂つてゐるやうに思はれてならない。ミころが、その嚴かなお住ひの前を、先日暑い日盛りに私は、カンカン帽を被つて、着流しで通り過ぎやうとした。その時、何か考へごミをして歩いてゐたミ見えて私は水野さんのお宅の前ミいふこゝろさへも實は知らずに歩いてゐた。するミ、急に目の前にバラ・バラミ雨のやうな白い光が落ちて來た。「變だな、こんな青空に、また聚雨かな」ミ思つて空を見上げ、ミ同時に、びつくりして立止つた。見るミ、右側の水野さんのお宅の板塀の上に五六歳の男の子が二人、お腹を突出して、例の西洋の小僧小僧の銅像よろしく、しかもこれは念入りにも二基相並んで、私の頭を目掛けて放尿してゐるではないか。「あつ、これはしまつた」ミ思つて、慌てゝ前へ飛び出した。二人の子供が云ふこゝろがふるつてゐる。「たしかに、ひつかけてやつたよ。面白いね。ほんミうにかゝつたよ。」「うん、うまきいつたね」ミ。私は振返つて、「何處の小坊主だか知らないが、いや二人の内一人はきつミあの修身の先生の倅に違ひないが、ひさい目に遭はしをつた。うまきやられた。いまいまい限りだ」ミ心の中で不平を言つたが、急におかしくなり、思はず

聲を出して笑つた。その笑ひがさうしても止らない。電車に乗つても想ひ出して愉快なのである。自分の幼い頃、あんなこまをしたかしら、また幼友達の中にあんなのがるたかしら考へてみた。さうも想ひ出せない。たゞ、私が中學生の頃のこま、親戚の腕白小僧と一緒に風呂にはいつたこまがあつたが、その子が風呂の中でジャー・ジャー面白さうに放尿してゐたこまを想ひ出すだけである。その時から私はその家の風呂にはいるこまは願ひ下げにして貰つた。

大川へ行つて水をあびる方がまだと思つた。また、それをその子の父親にも母親にも訴へてみたが、二人とも笑つて、「あの子はよくお風呂でするのでね」こま平氣の平左衛門だつた。呆れたものだ。その腕白小僧も今は中學の教師をしてゐる。子供も四五人持つてゐるが、その中の一人位は親譲りの癖を受けついであるかもしれない。私も少年期には手のつけやうのない暴れん坊だつたといふ話であるが、一體どの位の限度だつたか、臍氣な記憶の隅々を探つて、出来るだけ率直に自分の幼い頃の姿を掴んでみたい気がする。また、もし許されるなら、この誌上に寫し出してみたい。しかし「幼児の教育」の讀者諸姉は恐らく男の兒の腕白日記には興味はお感じにならないかもしれない。早い話

が、この水野さんの小便小僧の話でも私が面白がる理由がお分りにならないのではないかと思ふ。風呂の中の放尿は言語道斷で、これは馬鹿者といふより外名つけやうもないが、青空を背景にして、大人の手の届かない高い高い處で、無邪氣な子供が二人、自分等の新計畫を試みんものこま、白いお腹を突出して、息をこらし、待伏せしてゐるうちに、やつこその目的を達成したので、鬼の首を取つたやうに、萬歳々々を唱へてゐる子供の姿を、一寸想像して御覽なさい。私は嬉しくなつて、もつこカンカン帽の上にバリバリ落してもいゝよ、こま言ひたい。

愛する子供よ。この二人は何處の子供でもいゝが、本當にお前達は我々のものだ、愛する子供だ。お前達の知慧のある限りを絞り出して、嶄新奇抜な遊びを發見してくれ。塀の上から時ならぬ雨を降らすのは感心しないが、男の兒なら、そんなこまもあり得るだらう。意氣地なしのお父さんが敢てなし得なかつたこまをするのは偉い子供だよ。高い塀に登るこまさへ、お前達には素晴らしいこまに違ひない。まして、よその大きなおぢさんのカンカン帽に爆弾の雨を降らせるこまは、ノモンハンの大空でわが荒鷲がロスケの青蠅を撃ち落すよりも痛快に違ひない。大人の出来な

いごころをしたお前達には勲章をあげよう。大人はいつでも、お前達に通用しない大人の考を強ひたり、禮儀作法を教へようご努力してゐる。いつの世にも通じなければならぬ禮儀もあり、作法もあり、風習もあるにはあるが、それにて時代と共に變化してゐるごころを、大人は考へるほご寛容な氣持を持つてゐない。大人も子供も同様お山の大将が好きなのだ。十や二十の少青年が四十や五十の老人の氣に入るやうではこの世は進歩しない。男の子なら、うんご暴れて、家の柱の二本や三本へし折るほごの元氣があつていゝ。この怖い顔のおぢさんの頭に小便をひつかけて、しかも翌日はケロンごして、前日の大成功さへも忘れてゐるのがお前達だ。偉大な英雄だ。大人になるご、善事にしろ、悪事にしろ、頭の中はハキダメになつてしまふ。いゝ智慧なんかはいり込みやうもない。お前達こそ「日に日に新にして又日に新なり」なのだ。

私は愉快なこの日、永年の宿望が叶へられて、端溪の水巖「水歸洞」を手に入れた。明の時代の古硯の由であるが、形さいひ、色さいひ、申分が無い。眞理は、美は、喜はまごころに限りない。求める心に與へられないでもないものだご、つくづく感じた。懐に名硯を抱きながら歸つて來た

が、勿論、もう水野さんの塚の上には何もゐない。二人の英雄はお晝寝でもしてゐたのか、それとも墓地の方へ蟬取りに大きい子供のお伴をして行つてしまつたのだつたか。蟬の聲だけかまびすしい午後だつた。

### 事變句抄

突撃を露草に待つ眞暗がり	一仙
監視小屋たゞ空瓶に野菜與挿す	三猿子
背を向けて母泣き給ふ秋の蚊帳	虛白
引鐵握りもうごころ切れし鼻の汗	行人
身に入むや泣く母叱る父老いたり	洪水